

美馬市美馬町の板碑

考古班（徳島考古学研究グループ）

岡山真知子^{*1} 小林 勝美^{*2} 三宅 良明^{*3} 福田 宰大^{*3}

要旨：昨年度実施した木屋平地区には多数の板碑が造立されていたが、美馬町では、美馬郷土博物館に板碑が3基収蔵されているだけである。本報告は、この板碑の調査報告をするとともに、旧美馬郡（美馬市・つるぎ町）内の板碑についてまとめて考察したい。

キーワード：阿波型板碑，美馬郡内の板碑，双式板碑

1. はじめに

板碑とは、石製の卒塔婆のことで、中世に造立された。分布の中心地の一つに阿波国があるという独特の考古遺物である。昨年度は、中世忌部氏の中心地でもあった美馬市木屋平の板碑を調査し、150基の板碑を確認したが、おそらく241基の板碑が造立されていたと考えられる。本年度は、美馬町の板碑を調査したが、美馬郷土博物館に保管されている小長谷出土の3基だけであった。そこで、今回は、この小長谷の板碑を報告するとともに旧美馬郡の板碑についても考察することとした。

2. 美馬市美馬町における板碑の調査

1) 調査の経過

期 日 2008年8月1日(金)・2日(土)・3日(日)
2009年1月18日(日)
調 査 員 三宅良明，小林勝美，岡山真知子，福田宰大
調査協力 美馬市教育委員会，願勝寺，尾形昭二，尾形昭文
内 容 美馬市美馬町の板碑3基の実測調査

2) 美馬市美馬町の板碑の分布

板碑は、願勝寺先代住職の津田快洞氏が昭和29年、脇町との境にある小長谷大師庵の境内で石碑の台石として築き込まれていたのを発見した（『郡里町史』）。大師庵のある場所は、台地の南端に当たる場所で現在裏に大きな墓地が広がる（図1）。たまたま、大師庵で、お墓参りに来られた尾形さん親子の話から、板碑の出土場所などが判明した。板碑が出土した場所は、大師庵裏の山の中であり、そこには板碑の出土を記念して小石が積み上げられていた。取り出された板碑は、大師庵に本尊とともに祀られ、毎月21日には大師講が開催され、講衆の方々が集まってお祀りされていたそうである。

その後、板碑が美馬町郷土博物館に保管されるようになり、大師庵の本尊が盗難にあたりして、大師講は開かれなくなったそうである。10数年前には、裏山が墓地に改修されて、積み上げられた小石の山も撤去され、現在では板碑の出土地点は不明となった。なお、大師庵の前には延宝2（1674）年銘の庚申塔と天保13（1842）年の光明真言塔が建てられている。

3) 調査した板碑

小長谷大師庵裏山から出土した3基の板碑で、現

*1 徳島県立鳥居記念博物館 *2 阿波学会会長 *3 徳島市教育委員会社会教育課

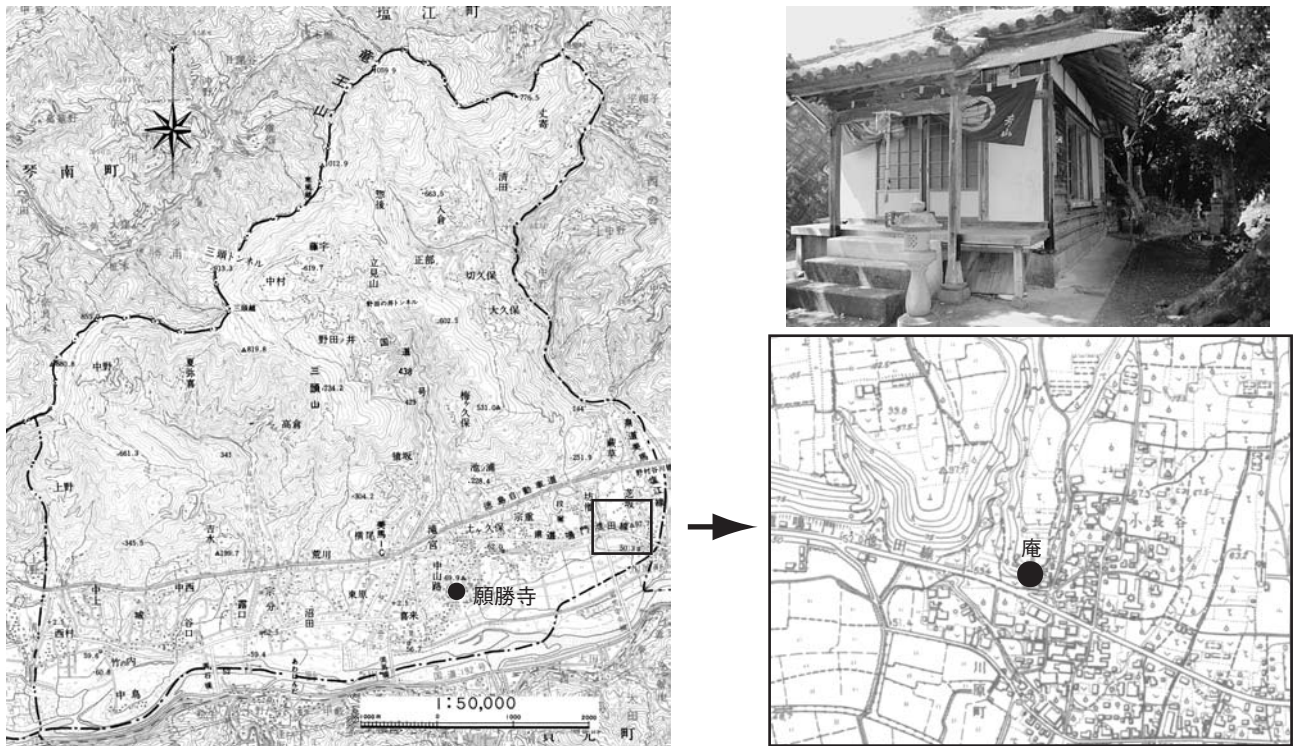


図1 美馬市美馬町における板碑の所在

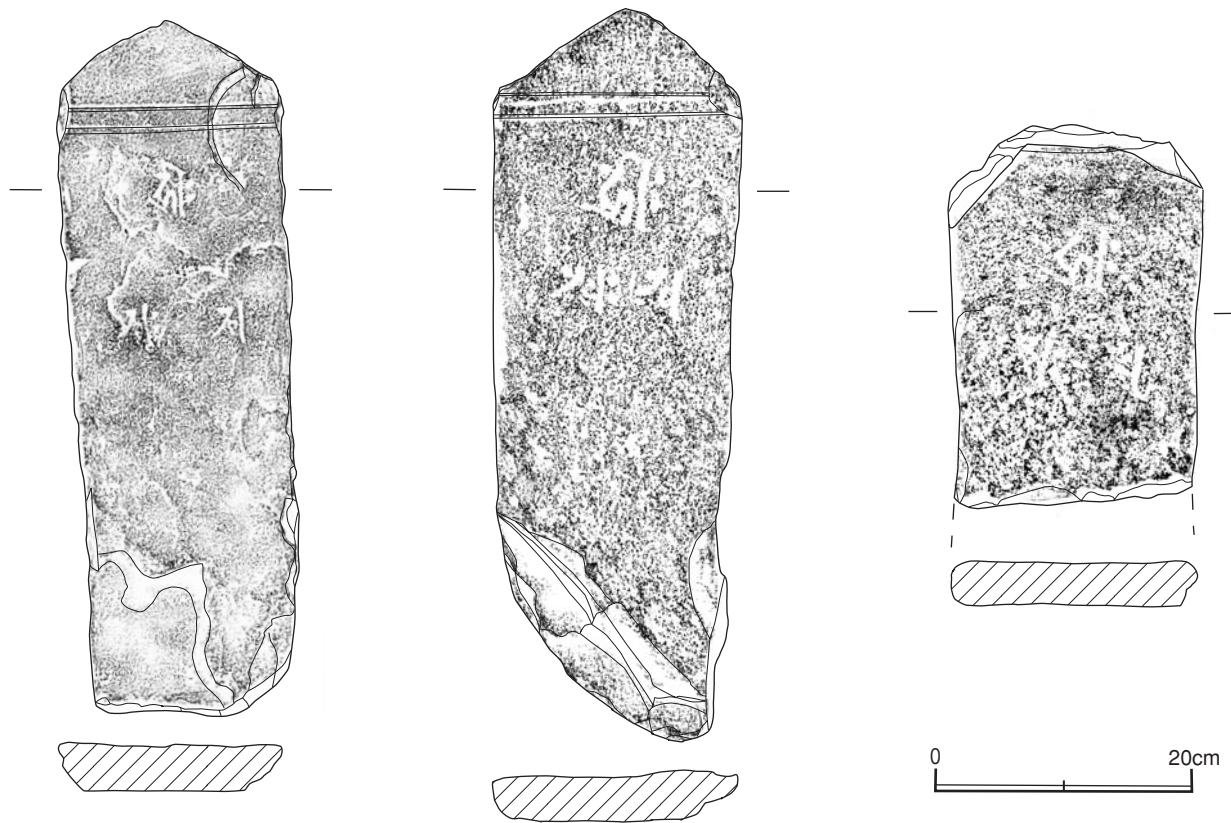


図2 美馬町出土の板碑実測図 (1 : 6)

在、美馬郷土博物館で保管されている。板碑は、3基とも阿弥陀三尊種子板碑で、紀年銘はない。大きさは小形に分類できる板碑である。

No.1は、長さ54.5cm・幅17.8cm・厚さ3.5cmを測る。中央に阿弥陀三尊の種子が刻まれている。

No.2は、長さ58.4cm・幅20.0cm・厚さ3.5cmを測る。中央に阿弥陀三尊の種子が刻まれている。

No.3は、長さ29.0cm・幅20.2cm・厚さ3.2cmを測る。中央に阿弥陀三尊の種子が刻まれているが、上下半を欠失している。

3基とも紀年名がないので、いつごろとは断定できないが、他の板碑と比較すると、小規模であることと、キリークの文字から室町時代後期と推測できる。

3. 旧美馬郡(美馬市・つるぎ町)の板碑の考察

1) 旧美馬郡の板碑の研究

徳島県での板碑の研究は、鳥居龍藏の「敢て徳島人類學會に望む」とのタイトルで板碑研究等を奨励したことに始まる。これは、徳島日々新聞に明治25年10月21・22・23日に連載された新聞記事であるが、これが『東京人類学会雑誌第80号』(1892(明治25)年)に再掲載されている。

これを一つの契機として、阿波での板碑研究が進んでいく。旧美馬郡では、特に笠井新也・藍水兄弟の活躍がめざましい。笠井新也は、徳島女学校教諭時代に明治42年「阿波の板碑」(笠井, 1909a)を発表した。これは、河野(1904)をベースとして阿波板碑分布表を示し、徳島城山山頂の板碑について詳しく紹介している。その内の西面して北にある板碑が五輪塔線刻で、五大種子が刻まれており、紀年銘は「康暦二年庚申二月」であると指摘している。この論文に対して河野芳太郎が「『阿波の板碑』を読む」と題して笠井氏の論を評価し、さらに追加の地名をだされている。また、自分の論文のいきさつや鳥居(1892)や和田(1904)も紹介している。同じ雑誌には、笠井氏の「阿波の板碑に対する反響」(笠井, 1909b)も掲載されており、「阿波の板碑」(笠井, 1909a)の反響の大きさを述べられ、新たに板碑の追加地名を出されている。

次いで、長野県立上田中学校時代に「板碑の新発見(阿波國に於て)」(笠井, 1911)『考古学雑誌』

(第1巻第11号, 考古學會)で、藍水・文夫の兄弟から寄せられた情報を基に論考している。

笠井藍水は、『美馬郡郷土誌』を編纂し、その中に古墳の一覧表や板碑の一覧表を掲載している。この『美馬郡郷土誌』をベースにその後『郡里町史』をはじめ、各町村で町村史がまとめられ、板碑の所在もその中に記述されている。『美馬郡郷土誌』の再刊版である『新編美馬郡郷土誌』では68基の板碑が紹介されている。先述した美馬町の板碑もこの中に掲載されている。ただし、所在する場所と数しか記載されていないので、詳細は分からない。

その後の調査等で穴吹町73基(『穴吹町誌』)・一字村2基(『一字村史』)・脇町164基(『阿波脇町の文化信仰遺産総集編』)・美馬町3基・貞光町8基(『貞光町史』)・半田町21基(『半田町誌』)・木屋平村241基(『木屋平村史』)の369基の板碑の造立が想定できる。

以後、旧美馬郡での板碑について現在判明している範囲で分析を加えるが、便宜上、①穴吹、②美馬・脇町、③貞光・半田・一字、④木屋平の4地区に分けて考察する。

2) 板碑の標識(図3～図6)

①の穴吹地区では、標識が判明した板碑が26基あり、阿弥陀三尊種子17基、五輪塔線刻+五大種子1基、大日如来種子(バン)3基、文殊菩薩種子1基、カーンマン種子1基、ポロン・バン・ウーン1基となっている。標識が判明した板碑は少ないが、文殊菩薩種子、カーンマン種子、ポロン・バン・ウーン種子といった特殊な種子が多いのが特徴である。

②の美馬・脇町地区では、標識が判明した板碑が102基あり、阿弥陀三尊種子100基、五輪塔線刻1基、五輪塔線刻・五大種子1基となっている。阿弥陀三尊種子板碑が多数を占めている。

③の貞光・半田・一字地区では、標識が判明した板碑が14基あり、阿弥陀三尊種子8基、阿弥陀画像4基、五輪塔線刻+五大種子1基、大日如来種子(バン)1基、ア種子1基となっている。阿弥陀画像板碑がこの地区だけで認められる。半田では阿弥陀画像板碑の双式板碑が2組も存在するという特色がある。県内でも稀有な例である。

④の木屋平で標識が判明した板碑が146基あり、

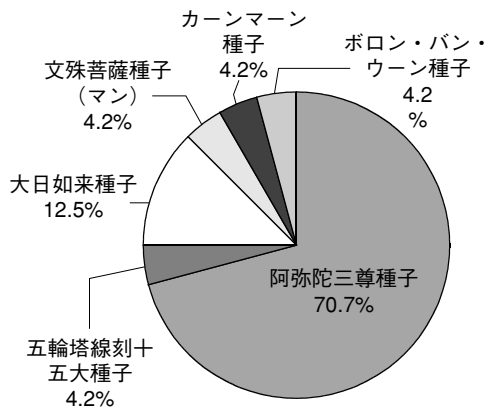


図3 板碑の種子割合 穴吹地区

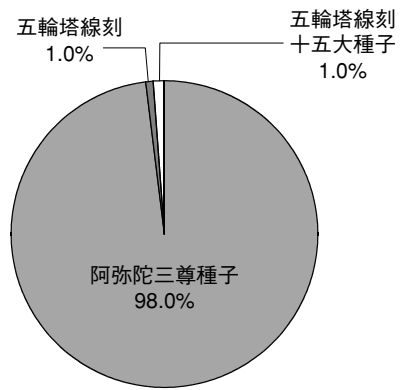


図4 板碑の種子割合 美馬・脇町地区

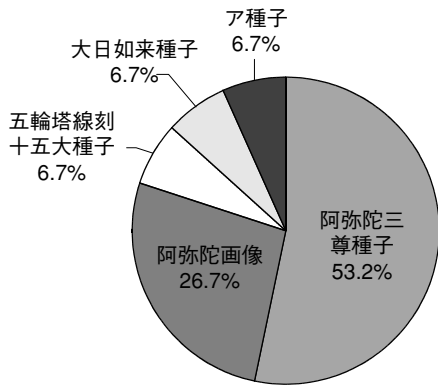


図5 板碑の種子割合 貞光・半田・一字地区

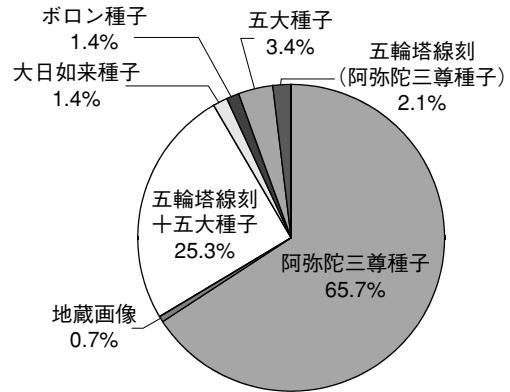


図6 板碑の種子割合 木屋平地区

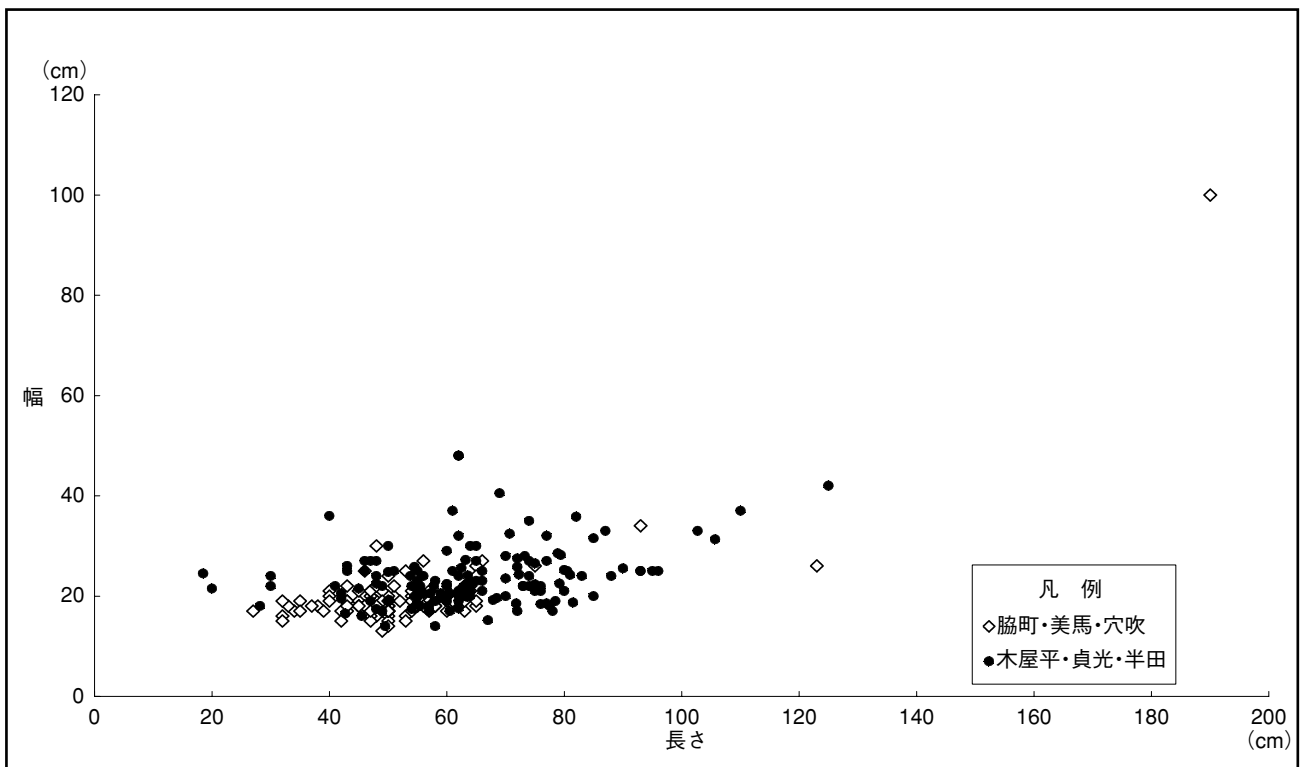


図7 板碑の大きさ

これをグラフにしたのが図6である。阿弥陀三尊種子が多いが、65.7%であり、五輪塔線刻（五大種子）が25.3%，五大種子が3.4%，五輪塔線刻（阿弥陀三尊種子）が2.1%，大日種子・ボロン種子が1.4%，地藏画像が0.7%を占める。徳島県の平均的あり方からすると、五輪塔が多い点と名号板碑が1基もみられない点が特徴である。

美馬郡全体をみると、阿弥陀三尊種子が78.1%，

五輪塔線刻＋五大種子が14.1%，大日如来種子が2.1%，五大種子が1.8%，阿弥陀画像板碑1.1%である。他は0.4%（各1基）である。阿弥陀系が多数を占めるが、特殊な種子板碑が多く見られるのが美馬郡の特色と言えよう。

3) 板碑の大きさ (図7)

大きさのデータのある板碑があるのが脇町・木屋平地区で、他地区は少ないので、大きく2地区に分

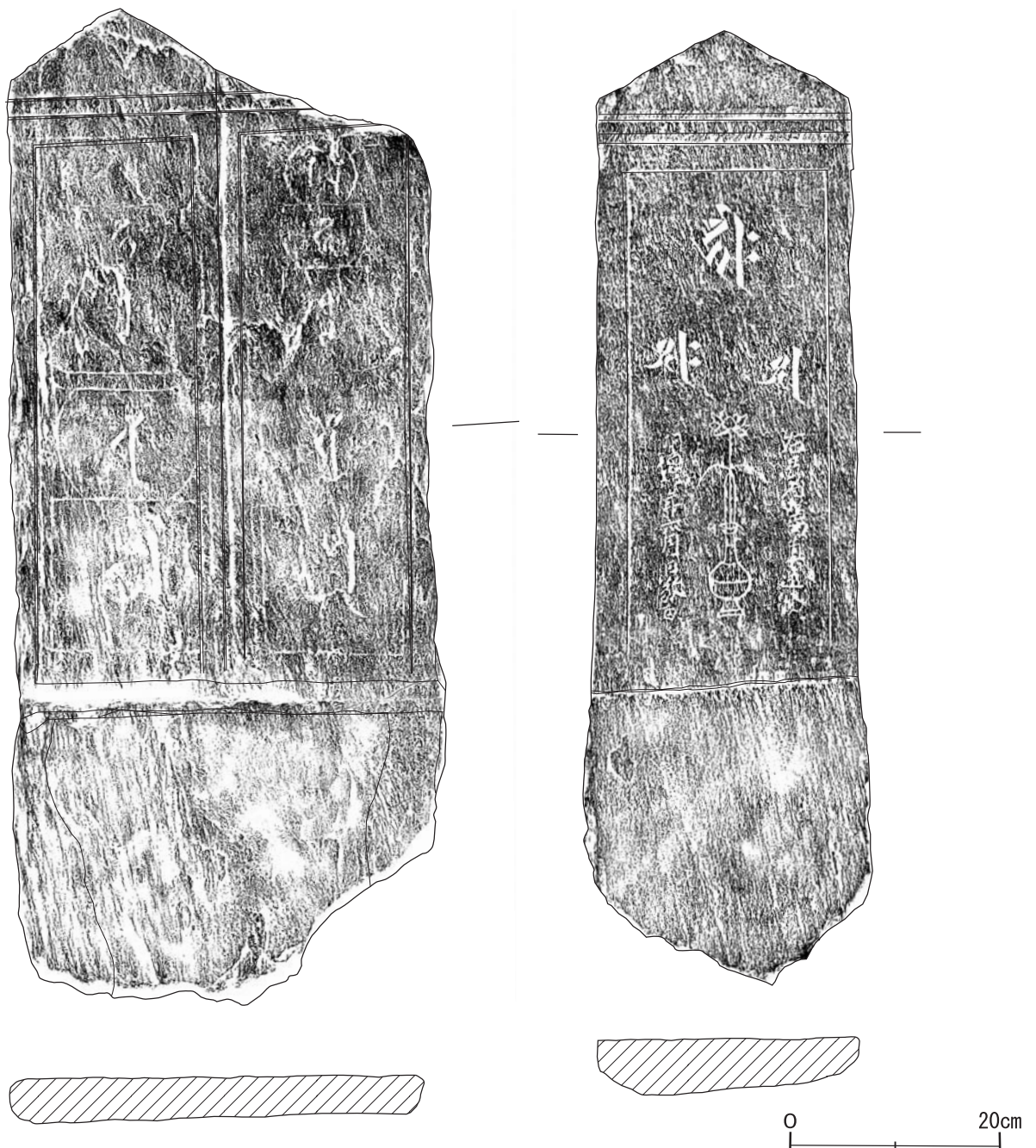


図8 木屋平・井内家板碑（双式板碑と紀年銘板碑）（1：6）

表1 旧美馬郡内の紀年銘板碑一覧

No	西暦	長さ	幅	厚さ	所在地	二線	枠線	標識	紀年銘	参考文献
木屋平01	1383	90.0	19.0	5.0	木屋平大字南張 森本伊三郎	有	有	阿弥陀三尊種子	右志者為仏□靈位 永徳三年八月十三日敬白	木屋平村史
木屋平02	1385	91.0	27.0	4.0	木屋平大字南張 森本伊三郎	有	有	阿弥陀三尊種子	右志者為朝能逆修善根造立至徳二年□月□日	木屋平村史
木屋平03	1393	93.0	25.0	2.5	木屋平大字大北 井内弘			阿弥陀三尊種子	明徳四年	木屋平村史
木屋平04	1394	74.0	35.0	4.0	木屋平大字樺木 梅津家墓地	有	有	五輪塔線刻	明徳五年	岡山他2008
木屋平05	1395				木屋平				□徳六・九月	木屋平村史
木屋平06	1396	55.0	21.0	2.0	木屋平大字樺木 中平キク			五輪塔線刻	応永三年一〇月	木屋平村史
木屋平07	1398	78.9	28.5	4.0	木屋平大字太合 檜堂	有	有	阿弥陀三尊種子	右志者□□□ 応永五年	木屋平村史
木屋平08	1404	85.0	20.0	4.0	木屋平大字太合 賢見神社	有	有	阿弥陀三尊種子	右志者遍？奉光寶？覺禪門也敬白 應永十一年卯月廿九日	木屋平村史
木屋平09	1408	64.0	20.0	3.0	木屋平大字森遠 西村茂信	有	有	阿弥陀三尊種子	応永一五年一二月（現在石井へ移動）	木屋平村史
木屋平10	1414	80.0	22.4	3.0	木屋平大字三木 善福寺境内	無	無	阿弥陀三尊種子	応永廿一年□月□日	木屋平村史
木屋平11	1415	95.0	25.0	4.0	木屋平大字二戸 戸田秀太郎	有	有	阿弥陀三尊種子	善阿禪尼建 應永二十二年十月廿一日敬白	木屋平村史
木屋平12	1415	96.0	25.0	5.0	木屋平大字二戸 戸田秀太郎	有	有	阿弥陀三尊種子	(真)高信禪門定診(逆修)？旅？爲 應永二十二年十月廿一日敬白	木屋平村史
木屋平13	1423	90.0	25.0	3.5	木屋平大字麻衣 柿のぼて	有	有	五輪塔+阿弥陀三尊+ア種子刻	右善門 十二 應永三十年十一月	木屋平村史
木屋平14	1449	73.0	22.0	2.0	木屋平大字樺木 中平キク			阿弥陀三尊種子	宝徳一？	木屋平村史
穴吹01	1353	56	27		穴吹町仕出原 尾下氏みかん畑の中		二重	大日種子(バン)	元師良門一十三 文和二七三 良尊敬白	穴吹町誌
穴吹02	1362	66	27		穴吹町拜村岡 原氏宅	一線	有	五輪塔線刻・五大種子	康安二年 十月 日 敬白	穴吹町誌
穴吹03	1361				穴吹町拜村字新開 新開文敏墓地				康安元年	穴吹町誌
穴吹04	1355	83			穴吹町拜村 戸白人神社社殿			バン・ボロン・ウーン種子	文和四 十二月廿二日 沙弥道勝	穴吹町誌
穴吹05	1357				穴吹町尾山 旧尾山小学校裏業師堂隣			キリーク種子	夜念佛結衆 僧教円 延文二年九月日 □之 益奉行也	穴吹町誌
脇町01	1375	58.0	18.0	3.0	脇町曾江寺屋敷	無	無	五輪塔線刻	応安八年八月日	脇町史
脇町02	1363	65.0	24.0	3.0	脇町曾江寺屋敷	無	無	阿弥陀三尊種子	貞治二年八月	脇町史
脇町03	1318	190.0	100.0	31.0	脇町曾江相原	無	無	阿弥陀三尊種子(一尊か)	文保二戊午十廿沙弥道信立之	脇町史
脇町04	1293~1299	75.0	26.0	2.0	脇町堂野摩利支天の祠	有	無	阿弥陀三尊種子	永仁	国見1983
貞光01	1359	55	23	4	貞光町西山 貞光寺墓地	無	有	バン(梵字)大日如来種子	延文四年 七月七日 敬 白	阿波学会貞光町
半田01	1377	64.0	30.0	9.0	半田町鹿老渡西久保	有	有	阿弥陀画像	永和三年八月□日	貞光町史
半田02	1377	66.0	23.0	3.0	半田町西山 松井正雄宅	有	有	阿弥陀画像	永和三年八月□日	貞光町史
半田03	1389	125.0	42.0	3.0	半田町松生 大日堂跡	有	有	阿弥陀三尊種子	自主一見心中廿七人孝子各々敬白 康応元年己巳十一月十日	貞光町史
半田04	1461	110.0	37.0	10.0	半田町上蓮	無	無	ア種子	寛正二年 大峰山 権大僧都貴明院法印雲 八月廿三日 三十三遍	貞光町史
一字01	1367	65.0	13.0		一字村大野 高山 旧墓地	無	無	阿弥陀三尊種子	貞治六丁	一字村史

けた。①は脇町・美馬・穴吹地区、②木屋平・貞光・半田地区である。データに使えた板碑は、脇町109基、美馬2基、穴吹2基、木屋平136基、貞光3基、半田地区7基である。上半部を欠くなど破損している板碑も除いて集計した。1基のみ大きい板碑があるが、長さ50~60cm、幅20cmの大きさに集中していることが分かる。つまり、美馬町で今回調査した板碑は、美馬郡の平均的な大きさであることが分かる。また、脇町の板碑がやや長さが長い板碑が

多いが、幅は狭い。長さ50cm・幅20cm弱に中心がある。これに対して、木屋平の板碑は長さ60cm・幅20cm強に中心があり、平均的には脇町より大きめの板碑が多いことが分かる。

3) 双式板碑 (図8参照)

双式板碑とは、板碑の大きさ、造立趣旨がほぼ同じで、造立年月もほぼ同時代の1組の板碑を双式板碑、連碑と呼ばれており、1石で2基、3基のもの、2基がまったく別個のものがある。

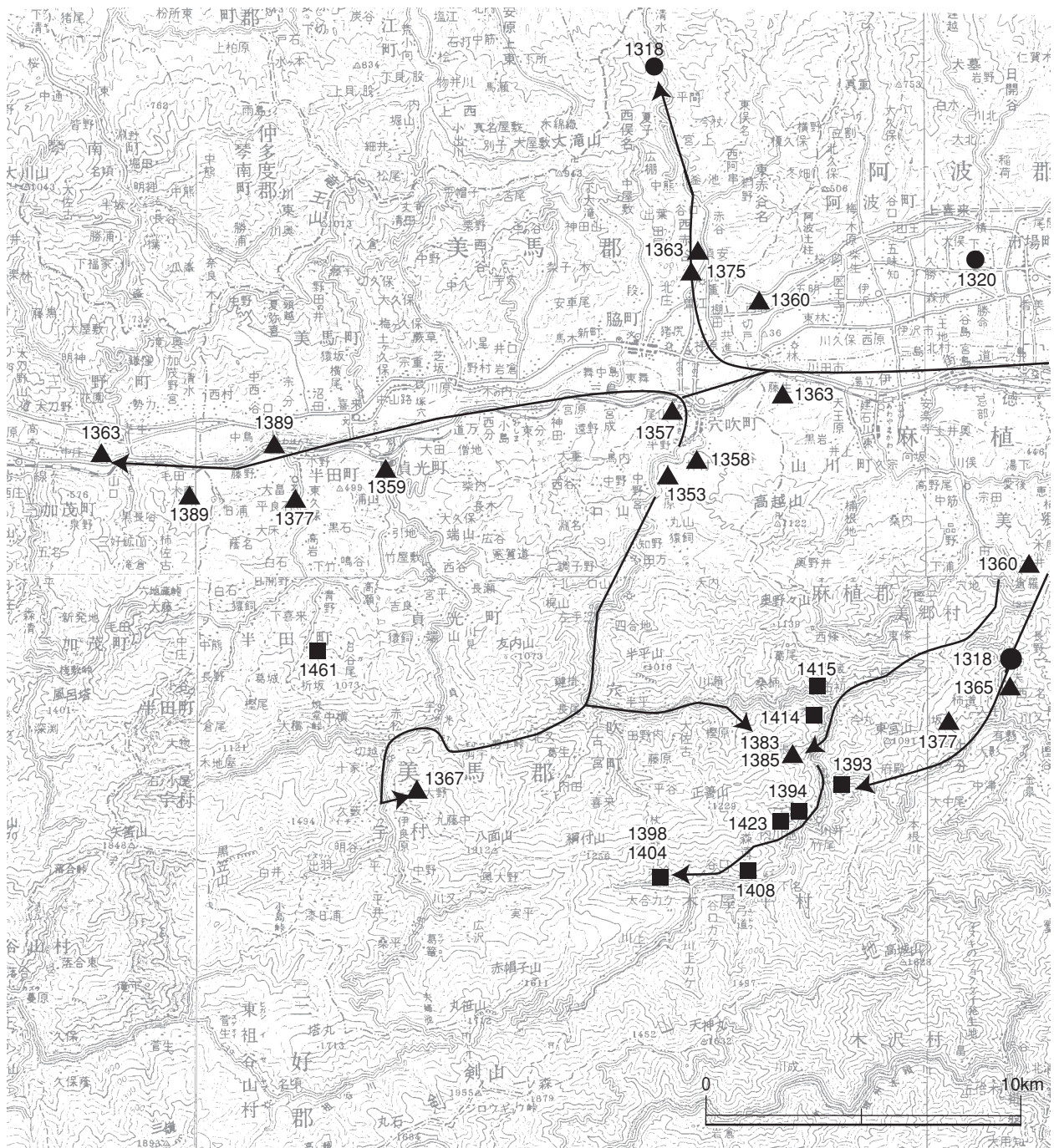


図9 旧美馬郡内の板碑の来た道 (●：第1期，▲：第2期，■：第3期，数字は板碑の西暦年を示す)
 (国土地理院20万分の1地形図『徳島』『剣山』『岡山及丸亀』『高知』を基図に作成)

一般的には、2基が別個の板碑である例が多く、この例は徳島県でも見られる。昨年の木屋平で確認した双式板碑は1石に2基の板碑が描かれている例である。『改訂木屋平村史』に3例が報告されているが、昨年確認できたのは大北・井内家の1例で、五輪塔線刻に五大種子を刻む板碑が2基並んでいる。管見の及ぶ範囲では石井町の石川神社に1例あるだけである。今回、この井内家の紀年銘板碑の実

測調査も併せて実施したので、ここに紹介したい。

なお、図8の右には井内家の紀年銘板碑を今回実測したので、併せて紹介する。

4) 紀年銘板碑

旧美馬郡内の紀年銘板碑は、『新編美馬郡郷土誌』では3基しかないと記述されているが、現在では木屋平21基、穴吹5基、脇町3基、貞光1基、半田4基、一字1基の計35基が知られる。それらの年代が、

木屋平1383年～1449年，穴吹町1353年～1362年，脇町1318年～1375年，貞光1359年，半田町1383年～1461年，一字1367年である。これらを地図に描き込んだのが、図9である。

図9で、●は第1期として鎌倉時代の造立，▲は第2期として南北朝時代，■は第3期として，室町時代中後期を示している。特に，脇町の文保の板碑は，旧美馬郡内で唯一の第1期の板碑である。徳島で，1270年に最初の板碑が造立されて，あまり年を経ないで，この地にもたらされている。定型的な板碑ではないが，早い時期に導入されており，香川県との県境近くという徳島県北部に位置する板碑である。

第2期は，1353年から1389年にもたらされた板碑で，旧美馬郡のほとんどの地域にもたらされる。

第3期は，14世紀末から15世紀初頭におもに木屋平地区で確認されている。また，やや遅れて，半田地区で1461年に造立されるのがこの地域の最終末である。吉野川沿岸そいの脇町・穴吹・貞光は14世紀には終えている。15世紀以後は，木屋平や半田といったやや奥地に見られるのが特徴である。

これを基にして，図9に描き込んだのが想定板碑の流通ルートである。美馬郡のすぐ西の三加茂町に存在する板碑が紀年銘板碑の徳島県西端にあたる。また，美馬郡一字村および木屋平村に位置する板碑が徳島県最奥地に分布する板碑である。

阿波型板碑分布の中心地の一つである木屋平地区をはじめ，穴吹・脇町でも多くの板碑が造立されている。ポロンなどの種子を含んだ種子の種類の豊富さ，双式板碑などの特徴的板碑を含んでいるのが，旧美馬郡の板碑の特徴である。美馬地区では，ほと

んど見られないが，その意味も含めて今後検討していきたいと考えている。

お世話していただいた願勝寺の津田氏ご夫妻をはじめ，関係の方々に厚くお礼申し上げたい。

文献

- 穴吹町誌編さん委員会編（1987）：『穴吹町誌』穴吹町。
 一字村史編纂委員会編（1972）：『一字村史』一字村。
 岡山真知子・小林勝美・三宅良明・福田宰大・中川 尚（2008）：「美馬市木屋平の板碑」『阿波学会紀要第54号』美馬市木屋平の総合学術調査報告。
 笠井神也（1909a）：「阿波の板碑」『阿波國史談會誌』第壹號。
 笠井神也（1909b）：「阿波の板碑に對する反響」『阿波國史談會誌』第貳號。
 笠井新也（1911）：「板碑の新發見（阿波國に於て）」『考古学雑誌』第1卷第11号，考古學會。
 笠井藍水編（1957）：『新編美馬郡郷土誌』美馬郡教育会。
 河野芳太郎（1904）：「阿波國分布の板碑に就て」『考古界第四編六号』考古學會。
 河野芳太郎（1909）：「『阿波の板碑』を讀む」『阿波國史談會誌』第貳號。
 国見慶英（1983）：『阿波脇町の文化信仰遺産総集編』。
 郡里町史編集委員会編（1957）：『郡里町史』。
 木屋平村史編集委員会編（1996）：『改訂木屋平村史』木屋平村。
 貞光町史編集委員会編（1965）：『貞光町史』貞光町。
 鳥居龍藏（1892a）：「敢て徳島人類學會に望む」徳島日々新聞，明治25年10月21・22・23日付記事。
 鳥居龍藏（1892b）：「敢て徳島人類學會に望む」『東京人類学会雑誌第80号』。
 半田町誌出版委員会編（1980）：『半田町誌』上卷，半田町。
 三木寛人編（1971）：『木屋平村史』麻植郡木屋平村役場。
 美馬町史編集委員会編（1989）：『美馬町史』上卷，美馬町。
 脇町史編集委員会編（1999）：『脇町町史』上卷，脇町。
 和田千吉（1904）：「阿波吉野川沿岸に於ける板碑の分布（図入）」『考古界第四編四号』考古學會。